

金朝初期の仏教 管見

——建国以前より太宗朝まで——

今 井 秀 周

先学諸氏の研究によると、おおむね金代に於ける仏教は国の手によって盛んに興されたとされていくようである。しかしその建国以前からの事情をつぶさに見ていくと、いささか異った見解を持たざるを得ない。本論は、ごく瑣末なことではあるが、管見と題し、まず金初の仏教についての陋見を幾つか述べたものである。

金朝の仏教を理解するには、まず建国以前からのそれを見ていなくてはならない。女真は中国東北地方に住む半農半獵の民族の一つであり、そして彼らの行っていた宗教は、この地域に普通なシャーマニズムであった。『三朝北盟会編』巻3には女真の風俗を記した一段があるが、その宗教形態という部分を次に引いておこう。

其疾病、則無医薬尚巫祝。病則巫者殺猪狗以禳之。或車載病人、至深山大谷以避之。其死亡、則以刃釐額、血淚交下、謂之送血淚。死者埋之而無棺槨。貴者、生焚所寵奴婢・所乘鞍馬以殉之。所有祭祀飲食之物、尽焚之、謂之燒飯。

ところで従来の説によると、金は北方の遼の地・南方の宋の国を滅して建てられた征服王朝であって、征服者女真の仏教信仰

は、それらの地に共通して仏教が盛んであったことによると論ぜられている。しかしそれだけではもともと宗教を異にしていた女真が如何に仏教信仰に移行したかという説明に少し欠けることになる。女真は既に建国以前から仏教のことをよく知っていた。否むしろかなりの者達が仏教を奉じていたに違いない。それが金朝を仏教信仰国ならしめた要因なのである。

女真が仏教を受け入れ始めた時期は、契丹人の治下に入った頃までにはさかのぼることができると思う。ことに契丹の支配力の強く及ぶ地域では、旧来の野性的な生活を続ける中で尤も仏教を奉じていたという。(先出『三朝北盟会編』同条) では一方、契丹の勢力から離れた地の女真の場合はどうかと、彼らが仏教を奉じたという資料を見出すことはできない。しかしながら、交易等を通じて契丹の高い文化・宗教がその中へ流れていくことは当然なことであるし、後になると特産物を契丹に納める義務を負わされることになり、両者の接触は漸く深くなっていくのである。また『金史』巻1世紀には次のような記載も見えている。

五代時……金之始祖、諱函普、初從高麗來、年已六十余矣。兄阿古迺、好仏、留高麗不肯徙。

この記事は史実としての信憑性に欠けるとされているが、祖先が仏教を好んでいたという伝承が女真の間に伝えられているということは、その信仰が古くから行われていたということを示すものと考えてよからう。

このように、女真は金朝建国以前より仏教を受け入れていたものであり、征服地に盛んであった仏教にもさほどの抵抗もなくなじ

んでいったと私は考えた。『金史』卷73宗雄伝に、初代皇帝太祖の子であり金朝建国に大功あった宗雄が建国八年目にして病没した際、彼のために仏寺が建立されたという記事があるが、女真が女真のために寺を建てるといふことからすると、既に彼らの中にかなり仏教が浸透していたに違いない。

さて次に女真達も益々信仰を深めたであろう太宗期の仏教を検討してみたい。太宗は年号を天会と改めたが、その始めは未だに建国戦乱のさ中にあり、世の中は騒然としていた。ふつう靖康の変とよばれるこの戦いは天会五年に終わったが、この時に破壊された寺観は数知れず、その再建には非常な努力が要ったという。ともかく金は黄河以北の遼と北宋の地を領土とし、その地にもとり承えていた多くの寺観を管理することになったのである。

ふたたび先学の研究を窺うと、占領地政策の一つとして、ここに寺観等への待遇を良くし、そこに帰依する人々の心を安んぜんとする策が行われたと論じられている。あるいはそうしたことも考えられたかもしれない。但したとえばそれが実行に移されたとしても、まだ的確な世情認識をもとに計画的に為されたものではなく、その場しのぎの対処に過ぎなかったと私は注したい。だいいち宣撫策として寺観を優遇したとみなされる記載はほとんどない。よくその例として引用される太宗の皇后が仏寺を建てたということも、全く皇后の個人的な信仰によって為されたと思われる。殊に公の目的があったとはいえないのである。また仮に宣撫策として仏教推進を国に敷きのべたとしたならば、天会元年に上京慶元寺の僧が仏骨を献じた際、なぜ太宗はこれを却けたりしたので

あろうか。、『金史』卷3太宗紀）資料の記述が簡単なので細かな事情は知れぬが、なにか矛盾するように思われてならない。さらにまた従來說かれる所の太宗は仏教を尊崇して仏教界は盛んであったという説にも疑問を持たざるを得ない。そうした見方は『仏祖歴代通載』卷19の記載に依るものと思われるが、しかしその記事はいかにも信憑性に乏しいものである。次に引いておこう。

癸卯、金改天会元年、……帝於禁庭親觀瑞光。光中現仏。即勅模像、殿庭供養。帝親掃洒、每食跪獻、累年無怠。每歲說会、齋僧万余。

詳細な考証は省くが、本書の金代に関する記述は疑問だらけなのである。太宗がかくも熱烈に仏を奉じたということは、別にそれを示す適当な資料もなく、他の事情から推してもいかにも度を過ぎてゐる。ただ、太宗が没する日の朝、仏が日の出と共に現われ、従者ともどもこれを礼拝したという説話が残っている（『三朝北盟会編』卷10所引「神鹿記」）ことをも考え併せると、太宗自身、仏教を奉じていたとは考えられよう。しかし、それと政治的に仏教界を盛んならしめることは別である。

じじつは太宗は仏教を尊崇するどころか、これに制約を加え始めるのである。それは天会八年の「私に僧尼を度することを禁ずる」との詔である。（『金史』卷3太宗紀）これはうち続く戦乱の中で、僧尼となって税役を遣れる者が甚だ多く、国家財政の維持などを慮って行われた処置と考えられている。そしてこうした宗教界に対する制約は、以後金朝歴代の皇帝に受け継がれてい

くのである。

以上のように、太宗の頃の仏教界は実はさほどに国の恩を被ったわけではなく、或は帝室の個人的信仰対象として利を得た寺もあったにせよ、国家政策全体から見ると、反って統制を受けたという傾向が大きいように思われる。もっとも、太宗の代に於ては、後世のきびしい統制にはほど遠いものであって、その治も半ばとなつてやつと宗教界の腐敗ぶりに気づいた太宗が、政治的肅清策をばつばつ加え始めることにしたというのが実情であつたであらう。

定散通撰の三心の意義について

秦 治 人

「観経」定散二善十六観の展開の中で、定善観法が韋提希の請求に應じて説かれたのち、散善の上品上生が新めて自開されるについて、「上品上生者、若有衆生、願生彼国者、発三種心、即便往生。何等爲三。一者至誠心、二者深心、三者廻向発願心。具三心者、必生彼国」として「三心」が先ず願生者の発すべき根本条件として述べられている。これは如何なる意味を示すのか。

この意味について特に善導及び宗祖の観経理解の上から定善観門との関連、宗教的連続性等の方向より問うてみる。「観経」はもともと苦悩の凡夫、業縁に悩む韋提希夫人の教我観於清浄業処、或いはその方法たる観見の思惟と正受の道を請求することに

於いて、それに答えんと宗教的救済の観法が説かれることに始まり、やがて観想観門の展開から必然的流れであるかの如く散善が自開され、そこに定散二善・三福が摂められているのである。善導に限らず、それ以前より、多くの聖道門の諸師達が観経疏を造りそれぞれの立場より観経精神について論ずるものが「観経」であるが、真に浄土教的精神を「観経」の中に見出したのは善導であるといわねばならない。従つて又、浄土教の伝統に於ける善導の観経解釈は、仏教に於ける浄土教的人間観、否人間の宗教的根源の姿を我々に開示せしめるものであると考えねばならない。善導に依つて明らかにされた観経とは単に浄土教的人間の実存を開明するのではなく、末法・五濁の人間そのものの宗教的実存をそこに説き示し、我々の人間の源初的在り方と救済の論理をうなづかしめるものである。即ち業縁存在の人間の在り方と宗教的苦悩及び救済が、正に観経に説き明かされるところの内容と言わねばならない。業苦の中に悲求された浄土観見願生の道、そして釈迦自問自答より説示された三心往生の散善の行門、更には常に定散諸機の宗教的願行のうちに響いてくる如来弘願の大悲心の叫びたる如来招喚の南無阿弥陀仏、かかる願生的定散門と弘願の大悲心の呼びかけが交響する世界が観経であるといえよう。それは正しく善導によつて「観経」とは「観仏三昧を以て宗と爲す、又念仏三昧を以て宗と爲す。一心に廻願して浄土に往生するを体と爲す」とおさえられることであり、釈迦は韋提希の請によつて広く浄土の要門を開きつつ、必然的に又「安樂の能人別意之弘願を顯彰す」と明らかにせられる所以である。釈迦は韋提希に息慮凝心の